
第六天魔王の真実

狂王ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第六天魔王の真実

【NZコード】

N8026M

【作者名】

狂王ライ

【あらすじ】

前世では最強の剣術といわれるほど名高い犬神流本家の元に生まれた。

しかし、後継者決定の際、兄に闇討ちされて殺害される。

そんな彼は大天使と出会い、新たなる異世界。未知の世界へと飛ばされることになった。

時は戦国時代。彼はこの世界でどう生きていくのだろうか……。

恋姫にヒントを得て書き始めます。キャラの性格、武器などもバサ
ラや

戦国ゲームにヒントを得て書きます。時々、アンケートをとるので
参加してくださるとありがたいです。オリジナルなのでうまくない
と思いますが、
よろしくお願ひします。

せつめい……。（前書き）

ジャンルはよく分からなかつたのでファンタジーにしておきました。
オリジナルで、歴史との矛盾も発生しますが、そこは僕の容赦ください。

はじめに……。

……とつあえず、『JIGI』だ?

おかしい……。確かに犬神流剣術後継者に選ばれ、それを妬む兄に殺されたはずなのに。

「私がお前を呼んだのだ。」……誰ですか？

「大天使ライエルだ。」

これまたおかしいなあ、大天使の名前にそんな人はいなかつたはず。

「所詮は人間の決めたことだ。ガブリエルなどという大天使はない。」

そりなんだ……。教皇あたりが聞いたら驚くだろうなあ。

「話が脱線したので元に戻すぞ。お前は確かに一度死んだ。兄にな。」

やつぱり死んでますよね。もつと生きていたかったなあ。好きな子とも婚約できたのに。

「だから、そんなかわいそうなお前にもう一度生を『えよつと思つてな。』

そうなんですか？

「すまん、うそついた。実はな、新しい異世界が出来てな……。

そこまで手が回らないのだ。」

なるほど、日々多忙な生活を送っているといふことですね。

「ああ。無能な神様に日々悩まされて生きている。」
上が大変だと大変ですよね……。

「「ホン！また話が脱線したな。どうやら新しい異世界は主らの歴史の世界の話のようでな。年代は戦国時代といったところだ。」
それまた厳しい世界に生まれ変わるんですね。速攻死にそうです。

「なに。安心せい。そうならぬように身体強化をしてやる。日本など沈められるほどなのな。」

それだけあれば僕には十分ですね。犬神流という剣術も覚えてい
ますし。

「刀もやうう。危険すぎて人間には持たせることが出来ぬ品物な
のだが、お前なら問題ない。」

ほっ！神様のかごやらがついているんですね。

「勘だ……。」 said ですか……。

「まあ、どこの家に生まれるかは分からんが、生まれた家によ
つて立ち居地が変わつてくる。」

そうですね。織田信長の元では生まれたくありませんね。

「第六天魔王などといわれてゐるが、あんなものが魔王だつたら
地獄は魔王であふれかえるわ。」

へ、へえ～。そうなんですか……。

「ふむ……。少し話しそぎたな。時間が無いようだ。」
たしかに、体が消えかかっていますからね。

「よし、でははじめるぞ……。大天使ライエルの名において！この者に新たなる生を！！」

……完全に意識が落ちた次には見慣れない天井が待っていた。

はじめ。 (後書き)

いかがですか?

まだまだ序盤なのでよく分からぬかもしだせませんが。
少し、満足して書いたつもりです。

これからもどうぞよろしくおねがいします。

二十七日から入院するのでしばらくは更新できません。

真実その一 「もし、緊張しなきゃいけないんだよ……」（前書き）

えーと、退院いたしまして、ようやく活動が再開できました。
まだ見ていない方もいらっしゃると想つのでこれから人が集まつてくれればいいな
と、思っています。

よろしくお願ひします。

歴史との相違点？あつたほうが楽しいじゃないですか。
一応、歴史に乗つ取つていくので。ただ、主人公は未来を知つてい
るっていうだけなんです。

「も、緊張しそうじゃったんですね！…！」

「おぎやああああ！！

あ、どこかで赤ん坊が泣いている。それにやはり言つべきだな。
知らない天井だ。

あれ？ 視界がなんだか狭いなあ。え？ ちよ！ 体が浮いてる！
「信秀様！ 元気な男の子が生まれました！」 「おお！ そうか！ 早速、名前を付けねばな……。」

ああ、そうか。だから赤ん坊が泣いていたのか……。その赤ん坊はどこに？つていうか体が浮いたままなんですけど……。あ、目の前に知らないおじさんか……。

「お前の名は吉法師だ！」

も、もしかして、俺が赤ん坊で？！たった今名づけられたのも俺！？、しかも吉法師つて。

頭に思い浮かぶのは様々なゲームで悪役ぶりを發揮する信長……。
ヲワタ……。

(ちなみに此花堂の幼名である)

「む？ 急におとなしくなったなあ。腹でもすいておるのかい？」

「おい、乳母を呼べ。」

きや いけないんですか！？？

「はい、お乳をちゃんと飲んでくださいね。」

なんといふ「ことだ……」
「十五歳にして女性の學を食ま
うればならないなんて……。」

な、なんか緊張してきた。で、では……。

「イヤアアアアアア！」あ、口の中に鉄の味が。

「おお、なんじゃこりゃ」とだー・じやつ、歯みがきを始めたんだー・。」

あう……、すみません！わざとじゃないんです！本当なんですね！
少し緊張しただけなんですよ！

その後も数人くらい噛み切つてしましました。本当にすみません。
眞実その一、織田信長が乳母の乳房を噛み切つたといつのは緊張の
し過ぎが原因だった。

その後、たつた二年で城主になつた……。本当にいいんだろうか。
二歳で城主つて……。

真実その一 「あ、緊張しちゃひやつたんですね……」（後書き）

あーすみません！

なんだか短くなつてしましました。次回からは『氣をつけますのでよろしくお願ひします。今度はこの世界について語りたいと思ひます。

竹千代なるものと魔王の出来事（前書き）

中々、オリジナルといつてもあり更新が難しいです。
そんな私ですがよろしくお願いします。

竹千代なるものと魔王の出会い

竹林の中で銀髪の少年はたたずんでいる。風により葉が揺れ、心地よい音が響く。やがて葉が歌うのをやめるとゆっくりと田を開き、周りの竹を一閃する。刀をカチンと鳴らして鞘に収める。そうしてから竹が切れるのはお決まりのことである。だが、竹は一向に倒れない。これが犬神流剣術の特徴。

鋭き爪で魂を切り刻み。猛々しい牙で生氣を食らう。

相手の体を傷つけるのではなく、魂、精神を切り離し、相手を殺す。

兄はものすごいサドで相手を傷つけることに執着したために、当主に選ばれなかつた。

「次は、犬神流禁忌三十八番……。」「吉法師様!」「絶!」「え? うわあ!」

あれ、今人の声がした気が……

「何をするんですか! 危ないじゃないですか! ただでさえ貴方の剣術は恐ろしいのに! ガミガミ!」

涙目をしながら必死に説教をする家臣A

「「めんじめん、何か用があつてきたんじゃないの?」「は? ああ、そうでした。実は……。」

「？松平の嫡子が？」「ハフ！なんでも、叔父の裏切りによるものと。」

「ふーん。まあ、会ってみないとこには変わらないね。部屋に案内しといて。」

あ、そういえば言ってなかつたけど。あれから四年がたつているんだよね。それで考えたんだ。

大天使の人はここは異世界だといった。すべてが歴史どおりに進むわけではない。だつたら、第六点魔王なんて呼ばれなにような生活をしていけばいいと。だから、家臣や女中にもソフトにフランクに接しているんだよ？おつと、話が長くなつてしまつた。

「吉法師さま、おあがり……」「ああ、もう一…それ恥ずかしいからやめてつていつたじやん…」

「で、ですが！」「あー、もうこ…や。次から口をつけて。そして、松平の嫡子は……。」

あれかな？顔を伏せている栗毛の前髪が長い子。

「えへつと、君が……。」「た、竹千代と申しましゅ。」「じゃ、じゃあ顔を上げてよ。」

嘔んだー今嘔んだよこの子ー顔が髪の毛で隠れちゃつてよく見えないや。

「僕は吉法師。よろしく。そして、豈茹このせり」まどこして一緒に遊ぼうかー！」

「え？え？」「ほりほり早く早く。お口様は沈むのを待つてくれないよ。」

「は、ハイ！キャアー！」「へ？」

な、何も無いところで転んだ…これぞドジっ子パワーだな……。

「い、いらいれす。」「だ、大丈夫？おでこを打つちゃつた見た
いだね。……誰か！冷やすもの持つてきて！」「御衣！」

家臣Bが持つてきた水でぬらした手ぬぐいを受け取り、額に当てる。そのとき、前髪をよけたためか、彼女の顔があらわになる。

「へー、結構可愛い顔してるんだね？」「……、自分でやり
ますからー。」「

あ、ちょっと失礼なこといつたかな？顔を真っ赤にして怒りさせて
しまった。

「大丈夫？」「は、はい、何とか……。」「よかつた、可愛い顔
が傷ついたらどうしようと思つちゃつた。」「

「ん~、屋敷でおとなしく遊んでいようか、札遊びとか良いね。
「……すみません。」

「謝る」ことは無いよ。」「で、でも、私のせいだ。」「もう」の
話おしまーーそれよりも遊びまーー

「で、でも。」「でもはもうここの。ほら早くー。(一ノ口)」「ーー
／ハイー！」

それからはカルタなどで遊んだんだけど、強いの何の！全戦全敗！まあ、いつか！彼女の笑顔も見れたし！……そして夜。

「すうー、すうー……」「あらり、眠りしあつた。」肩に寄りかかりながら静かに寝息を立てている。

「しようがない。運びますか。」

彼女を客間まで運んだ後に布団を敷き、そこに寝かせる。離れようとしたんだけど。

「困ったなあ。袖をつかまれていては動けないよ。」

一回、本気で離れてみるか。だが、そのもぐらみもすぐに無駄となつた。

「……行かないで、お母様……。」「へへ……」

僕は男なんだけどな……。確かに、家臣の話では母はすでに生き別れてしまつてているとか。女の子の涙なんて見せられた日には断ることが出来ない。しかたない、ここで寝るか……。

竹千代 side

第一印象は、ちょっと怖い人。家臣に怒つてているんだから。でも、そんな印象は一気に吹き飛んだ。

「えへっと、君が……。」「た、竹千代でございましゅ。」

噛んじゅったーもうダメだ。絶対に怒られる。

「じゃ、じゃあ、顔を上げてよ。」

「ああ、せつと顔を上げたらぶたれるんだ。いやだよ。」

「僕は吉法師。よろしく。せつと、堅苦しこのままにして遊ぼうかー。」「え?え?」

怒つてないことに安堵はしたけど、初対面でいきなり遊ぶなんて。つまく返事できなかつたな。

「ほりほり早く早くーお口様は沈むのを待つてはくれないよ?」「は、ハイ! キヤア!」

痛いよお。なんで転んじゅつの?昔から何も無いといひながら転んでばかり。

「い、いらいれす。」おまけにまた噛んでしまつた。今度こそ怒られる。

「だ、大丈夫?おでこを打つちゃつたみたいだね。誰かー冷やすもの持つてきてー。」「御衣ー。」

あ、心配してくれた。こんな人、今までいなかつた。ひんやりとした手ぬぐいをおでこに当てる。顔をあまり合わせなかつたからよくわからなかつたけど……。カツ「いー。」

「へー、結構可愛い顔してるんだね。」「ーーーじ、自分でやりますか?ー。」

可愛い？私つて、可愛いのかな？同じ年の子には鈍くさいとか、のろまとか言われて馬鹿にされて、いつも内気になつて、髪も伸ばして顔が見えないよつてして……。田を付けられないよつてして……。

「大丈夫？」「は、はい、何とか。」「よかつた、可愛い顔が傷ついたらどうしようとした。」

また、可愛いって言つてくれた。

「ん~、屋敷でおとなしく遊んでよつか。」「……す、すみません。」

きっと私がドジだから……。迷惑かけやつたから……。

「気にしなくて良いよ。」「で、でも、私のせいだ。」「もうこの話おしまい！それよりも遊び！」

「で、でも……。」「でもはもうここの一歩、早々ー（一歩）」

「／＼／＼ハイー！」

笑顔も見せてくれた。とてもまぶしかったな……。私もこんな笑顔が出来るようになったら良いのに。元の

それから、カルタとかをやつました。私、こいつのが得意なんです！吉法師さんも負け続けて、勝ち逃げは許さない！もう一回だーー！とこのので、何回もやつて、るうちに夜になつてしましました。

遊びのをやめて月を眺めていると……。眠気が……。

夢の中で、彼が笑っています。まぶしい笑顔です。でも、だんだん離れていくて。その姿がお母様に似ていて……。

「行かないで……お母様……！」

一人でないでいると、やせここぬくもりを持つた手が……。

「ん……、じいじは……。」

布団の中。びつやけり開いてしまったようです。でも、なんだか、手があったかい。

横を見ると座つたまま眠っている吉法師様が手を握つたまま眠っていました。ずっと、そばにいてくれたようです。……そのせいが体が少し冷えているようです。

「私のため……。」「すう、すう。……<クチー

やはり、寒いのでしょうか、くしゃみをしてしまいました。……ふ、布団の中に入れてしまいましょうか？／＼べ、別に、いやらしことを考えているわけではなく、風でも薫かれてはいけないと思つてゐるだけです。

「起こせなこよつて元気なことね～と。」

体を横に倒してから、困つたことがある。びつやけり布団の上に乗せようか……。なんて考えていると、あつひのまづから、布団の中に入つてきた。

「／＼＼＼や、さすがに少し、緊張します。」

あつちからしたらそんなことほお構いなし。 いつかに近づいてきて腕を背中に回して抱き寄せられる。 か、 顔が近いです……！ 息が、 前髪にかかります！

その日の夜は疲れが出てきて眠るまでただただ顔をうつむせて目を閉じるしかありませんでした。

これが後に魔王と呼ばれる人との出会いでした。

FIN

竹千代なるものと魔王の出会い（後書き）

ん~、中々悪い主人公ですね。天然ウーマンキラーですねw
でも作者はこういうのが好きなのでこれを続けて生きたいと思つて
います。

前回よりかは読み応えがあるかと……。

まだまだ始まつたばかり、どうかよろしくお願ひします！――！

あれから一年……。「早い……。」（前書き）

さて、一年後の話になる予定です。

「早くない？」

すべては神《作者》の意思なのです。

「P.C.禁止をされてしばらく出来なかつたからでは?/?

……すべては神《作者》の意思なのです。

「図星ですね、分かります。」

；；；許してください。

「はい、では久々の更新です。どうぞ。」

……どうぞ。

あれから一年……。「早い……」

なんか随分と懐かしい夢を見たな。あれは確か竹ちゃん（親しくなつてからアダ名を使つよつになつた。）とあつた日のことだつて。

襖を静かに開けて朝田を浴びる。あれは二年前。一人の少女がこの城にやつてきた頃の話。あの夜の後はなにかと騒がしかつた……。理由は察してぐだせー。

「ん~、ハア。とりあえず、顔でも洗おうか。」

なんて呴いてみると慌てた様子の家臣が走つてきた。

「ハアハア、大変です！松平の頭首が病死しました。」

「それは本当？」「ハイ、直々に使いのものがやつてきて……。」

直々に使いのものが？それではやはり……。

使いのものと教育係の人、それと竹ちゃんこと竹千代。

それぞれが広い部屋に座っている。もちろん、城主である僕は正面、竹ちゃんと教育係の人は横に控えている。使いの人は頭を下げている。

「表をあげよ。」「ハツ！」

それなりに年を重ねた中年の家臣であるつか？その人がしゃべり始めた。

「この度は……」「そういうのは置いといて、用件は？」え？は、ハツ！前松平頭首様が病に伏せ、そのまま言つてしましましたのはお聞きいたしたでしようか？

竹ちゃんには言つてなかつたのでそんな……とつぶやき驚きの顔を隠せないようだ。

「ええ、真に遺憾です。」

形ばかりの挨拶を教育係……面倒くさいな。平手政秀がする。

「そして次の頭首をめぐつて争いを続けております。ですので…

…。」

「ここにいる竹千代殿を次の頭首にしたいと?」「一応はそれですまとまつております。」

「やはり……。」「あの、私のほかに候補は?」

「一年間音信不通であつた松平に新たな子はいないのかとたずねる」と、

「いえ、竹千代様以外には……。」

「だからこそ荒れるのだろう。他に候補がないのなら私が私がと次々に出てきた所に一人だけ心当たりがあると言つたのが目の前にいる人なのだとか……。」

「僕に決める権利はありません。彼女の人生です。彼女が決めるしかありません。」

「わ、私は……。」「竹千代様、どうかお願ひします。」

「先ほども言つたとおり僕に決める権利はない。……だけど、僕は賛成だね。君には才能がある。人を寄せ付ける人徳。そういうものが君にはある。」

実際に街に出たとき瞬く間に味方を作つていったのだから間違いない。乗っ取られるのではないかと家臣たちがささやくほどだ。そんな噂は速攻で封じたけど。

「それに君が目指したいものは平和だらう?ならばその平和に一番早く取り掛かることの出来る立場は……。大名だよ。」

「少し、考へさせてください。」「……分かりました、では私は明日も来ますゆえ。」

そういって立ち去るやうとした中年家臣に声をかけた。

「今日は泊まつていくといい。平出さん、案内頼めるかな?」「分かりました。」

「ですが……。」「僕の城には人一人泊める余裕すらないと?」「い、いえ! そんなこと!-!-!」

機嫌を損ねてしまつたと後悔する家臣とは逆にまたからかいが始まつたとため息をつく政秀。

「冗談ですよ、ではまた何かあつたらお申し付けください。」「かたじけない。」

冷や汗を流しながら退室していく一人。この部屋に残つたのは二人。

「さて、と。あまり時間はないようだね。冷たいようだけど、早めに決めてしまつたほうがいいよ?」

「頭首になるのはいいんです。でも……。」「そつだね、大人しく自分たちがつこうとしていた立場を素直に譲るつて事は、弱気な女の子の君を自由に操れると踏んだからだね。」

一番気になつてゐるところを突かれて少々暗くなつてゐる。

「実際、君には足りないものが無い。主としての自覚も力も頭脳も……。」

「だけど、王としての力は備わっている。どんなに頭がよくても、どんなに力があつても、民からの信頼がなければならぬ。君にはその力がある。民から必要とされれば、あちらでも優位に立てるだろ。う。強くなれ、人との絆を大切にするんだ。それが君の力になる。いざつて時は僕が君の力になるよ。」

次第に覚悟を決める顔つきになつていく竹ちゃん。もとい、松平家党首竹千代。いや、名前も変えるのかな？

「おつと、僕としたことが。まだ頭首になると決めてないのにね。じゃあ「はんにでも……。」

「いえ、私は引き受けます！絶対に、この世を平和にして見せます！！」

まだ八歳になつた女の子の言つことではないね……。これで、一応は歴史どおりに進むのかな？

「私は名前を改めます。松平家康。それが私の名前です。」

「では、家康殿。どうなさりますか？」「その人を「こうへ呼び戻してください。」

「そうこうと想つて、実は言つとすぐなこにいるんだよね。」

襖がすっと開いて先ほどの家臣が涙ぐみながら立つていた。平手は苦笑していた。

「さて、出立するのなら今日がいいだろつ。町の人達にも挨拶が出来る時間帯だし。」

それならば、と早速準備に取り掛からせた。

あれから一年……。「早い……」（後書き）

え～時間の都合によりこじまでおせでいただきます。

更新のペースといい何もかも勝手ですみません。

これから更新のペースをあげていきたいと思いますのでよろしくお
願いします。

名前を修正させていただきました。徳川 松平。

旅立ちの日、裏切りの月 前編（前書き）

題名のとおり、今日は一波乱あります。
久々にシリアルス???を書くので、了承しておくれやす。

……というわけで前回の話とおり今日、彼女が旅立つわけですがどうやら不穏な動きがあるらしくって……。教育係の平手さんと相談中。

「では、ここまで行つた所でじきりの道を……。」「ん~、だ
つたらこいつからいづ……。」

意見がまとまらない……。もう、最初からここからでよつか?

「ちうですね、ちうしましょひ。」「え? いいのかな?」

よかつたらしい……。」のままじや、意見もまとまらないし……。

「よし！家康ちゃんを呼んで。一人きりにしてくれないかな？」
「えへっ？」

「という話だつたんだけど……。」「不穏な動きですか？」「まあ、君が上に立たれたら困る人達だね。」

「私、大丈夫でしょうか……。」「まあ、やつてればなんとかなるよ。なんくるないわー。」

そうそう、なんくるないなんくるない。

「さて、さつきの話の続きなんだけど。君たちにはいいから出てもらいたいんだ。」

「死？」

母にPJCが殺されそうになつたので分けてお送りします。

旅立ちの日、裏切りの日 後編（前書き）

裏切りの日がのぼるとか、偽りし者は荒ぶる風へと姿を変ええる。

前回の続きです。

出発は夜。なるべく誰にも悟られないように動く。

理由は、彼女に上に立たれたら困る人。つまりは、薄汚いことを考えている奴ら。奴らが刺客を送り込んできている可能性がある。そして、事前に兵に教えた出発口は嘘。少数精銳。しかも、正しい出発口を教えた兵にもそれぞれ違う配置を教えている。

これで、正しい位置を知っているのは僕、竹千代、家臣、教育係平手政秀。計四人。

今日は青い月の夜。

一月に四回、この月が現れる。この日は妖魔や死靈の力が強くなる。故に出歩くものはいない。

兵でさえ仮病を使って休むものがいるくらいだ。そのくらいこの夜は恐れられている。

遂に出発。

「では、予定通りに……。」「はい。」「平手は留守番よひしへ。
「承知いたしました。」「

城を任せ複雑に絡み合つ森の中を進んでいく。安全が確実に確認
される場所までは僕がついていくことになった。分かれ道を右へ左
へ真っ直ぐに、斜め後ろとか……。

最後の分かれ道。そこに入つていく。

「やつぱり、君が間者だつたんだ……。」「……やはつ、油断しないほうがよかつたですね。」

そこには、城にいるはずの平手政秀……によく似た人間。

「君は誰？ 平手さんじやないね？」「そう、私は平手政秀じやない。」

女の声？ そう、思つた瞬間暴風が辺りを覆つた。一瞬、妖魔が起つたものだと思った。しかし、それは妖魔からではなく、彼女から出されたものだった。

背中には風の一文字。白の装束を身にまとい首につけたマフラーが彼女の風の強さを表すかのように激しくバタついている。

「……風の文字……。風魔党の忍びか……。」

この世界では相手の懷にもぐりこみ情報を収集し、報告する役田をになったものを聞者と呼び、それに留まらず、暗殺、工作を行う間者の中でもエキスパートを忍びと呼ぶ。

そのエキスパートの中でもエキスパート。風魔党の一族。伝説の忍者集団。

「厄介な奴を送り込んできたな……。これは手強そうだ。」「いつから気づいていた?」

「話し合いをしている頃だ。僕は面倒くさくなつて適当にこいつを選んだ。本当ならこいつのほうがいいと、この辺に長くいる者なら分かる」とだ。だけど、君は賛成した。そういうこと。」

「貴方を殺して、彼女を殺させてもうつ。それが任務だから。」

「なら、まずは僕を殺さないとね。」「ええ、覚悟して。」「覚悟なりこの世界に来た時からして。」

愛刀とまでは行かないが、刀を抜いた。相手も同じく、小振りの忍刀を両手に持つ。

地を足で蹴り、互いに素早く接近。一振り……。高い音を出してそのまま膠着。

「私と同じ速さなんて……。本当に油断ならない……。」「同じく……。」

空いている左手で切り上げをしてくるのでバックステップで回避。そこを逃すまいと素早い攻撃を繰り出す彼女。切り上げ、切り下げ、突き、縦、横、横、切り上げ、縦。

バキィイン！――

今までとは違つ音が響き、刀の破片が宙を舞つ……。

「刀が……。」「終わり。」

いや、まだだね。そう、呟いた時、彼女の表情が変わる。片手には先ほどの刀の破片。それを使い、切り上げる。

予想外の攻撃に回避が送れ、顔を隠していたマスクが破け、風で飛んだ。

彼女の端整で冷たい表情に走る十字の傷。予想通り、片目はつぶれているようだ。左側からの斬撃を捉えきれずにマスクを破いたのだ。

「思つたより……。」「……。」

無言で再び急接近。手に刀の刃が食い込む。追い討ちを掛けるような攻撃を受け止めたときに奔る痛み。滴り落ちる白らの血。血が抜けることで先ほどより頭が動く。第六感が叫ぶ、そこだと。

「ツとと、右だよね?」「…?」「次は左、上、上、下、右、下、上。」

予想できる限りの攻撃を予想していく。そして、それを聞いてか

ら変える攻撃パターンすらも……。

更に予想。最初の驚異的なスピードは無くなり、一撃一撃に力をこめて、無駄に隙を作っていく。
すでに、受け止める必要の無い攻撃。紙一重でノラリクラリとよけていく。

「当たれ！当たれ当たれ！！！」 「力まない力まない。」

でも、心なしか一撃が重くなりすぎていなかな……？石、碎い
ちゃつたよ……。

ラ崩壊

「氣のせいかな? 後ろから何か出てるんだけど……? あ、氣のせいじゃないか……。」

「……」

えー、説明しよう。憑き物使いとは、この世に存在する妖魔、死靈。その中でも高位な存在がいる。

それは人に取り付くことで私服を肥やしたりする。よく「よいではないか、よいではないか。」とか言つてる人とかも実は憑いていたりする。

稀に、この死靈、妖魔を屈服させることの出来る人間がいる。憑き物は力を与える代わり、ある感情を劇的に高ぶらせる。この子の場合は「怒り」と「不安」かな……？

その又、極稀にある感情を高ぶらせる」とも無く完全に屈服させることの出来る人間がいるらしい。

「ウルアアアアア……」「うわ……」

早いし、強いし……」んな攻撃何回もよけてられないよ……。
だけど、やるやく……。

「ウグ！？」「やつと、終わった……。」

ただのらりくらりしてた訳ではないんすよ？あらかじめ、封を作つておいたんです。

初歩中の初歩。まあ、陰陽師でもなければ、邪術氏でもありますから……。

「ちよつと、血を出しそぎたかな……？」「ルアアアアア……ウワアア……」

もがく彼女。いくら、もがいても、術の起点となる場所を見つけないと意味が無いからね。だから、あまり使われ無いんだけどね……。

「やあて、体を彼女に返してもうおつか……。犬神流剣術禁忌一番『殺生』」

心臓の左心房と右心房を見極め突き刺す。まあ、血も出なければ傷も無い。血管を通る生気の流れを止める。そのまま殺すことも出来るし、生かすことも出来る。

「ウ……ルア……。」「5，4，3，2，1……。終わり。」

刀を抜く。

憑き物は眠りに落ち、彼女は気を失ったまま倒れた。

旅立ちの日、裏切りの月 後編（後書き）

え～っと家庭内の事情で遅くなつてしまつて申し訳ありません。

今回一気にキーとなる単語を大量に出しましたので、次回はそれをまとめたいです。

今までのまとめとまだやつてない主人公紹介&キャラ紹介（前書き）

主人公の説明。キャラの紹介。先話で出た重要なキーを解説していきます。

今までのまとめとまだやつてない主人公紹介&キャラ紹介

まず、主人公紹介

名前 まだ吉法師（前世では犬神光圀。ちなみに光圀は代々当主が授かる名前）

犬神流剣術当主。本家の次男。本家の者しか許されていない剣術・禁忌を使つことを許されている。

身体能力も強化してもらつている。戦術はまつたりと相手を分析、相手の手を読む。

武器はまだ受け取つていないが、刀らしい……。とても人間には扱える武器ではないらしいが……。

キャラ紹介

名前 風魔の女

伝説の忍者一族風魔党の一人。松平の家臣に雇われた。

だが、憑き物による感情の高ぶりにより、冷静な判断が出来ず、敗れた。

顔に十字の傷。過去の負傷の跡らしい……。

名前 平手政秀

吉法師の教育係。現在行方不明。

名前 松平家康

幼名竹千代。叔父の裏切りによつて織田家に運ばれてきた同じ年の女の子。

家を継ぐために帰る途中。

もちろん、吉法師にぼれている。

死靈・妖魔

死んだ後に残る強い思念によつて残るのが死靈。物に取り付いたりする。

人を喰らい過ぎた結果、体に大きな変化が現れ、異形のものになつた猛獸。

憑き物

妖魔、死靈の中でも高位な存在。これが人に取り付いた際、その人の意識を乗っ取り支配する。

悪名高いものには時々憑いていたりする。

憑き物使い。

憑き物を稀に支配できる存在。一般的には強い信念や、意思がある者が支配でくるらしい。

憑き物から力を借りることが出来る。しかし、その副作用により感情の一部が劇的に高まる。

風魔の女の場合。「怒り」や「不安」

陰陽師

妖魔、死靈を消し去るスペシャリスト。俗に言つてクソシスト。

陰陽術を用いて悪を滅す。

RPGでいう白魔法的存在。

邪術師

陰陽師とは逆に妖魔、死靈を呼び出して戦つたりする。俗に言つ
悪魔使い。邪術を用いて敵を滅す。
RPGでいう黒魔法的存在。

今までのまとめとまだやつてない主人公紹介&キャラ紹介（後書き）

とりあえず、こんなものだつた気がします。
感想、評価をお待ちしております！――！

裏切りの忠誠（前書き）

久々の更新で申し訳ないです^_^
なことやこの作品をお願いします。

裏切りの忠誠

忍び side

この城の城主、吉法師は幼いながらも尾張一の剣豪としても名高い。そして、政にも才を發揮している。

そして、この城に忍び込んだ刺客は誰一人帰らない。先日も一人処分されたところ。

油断はならない。だが、心のどこかで油断していた。所詮、まだ八歳と……。

教育係平手政秀に化け、遂に出発の日。ここに来た家臣というのも偽者。

万が一、私が失敗したときの保険だろ?……。

そして、やはり油断ならなかつたようだ。こちらの策はばれてい
た。

尊びおりの剣豪。視界に外れるほうから攻撃していく……。

そして……、感情が「不安」に駆られ、怒りが生まれてくる。

これで奴も終わりだ……。

「彼女に体を返してもいいよ?」

意識を取り戻してきた……。戦闘が終わつたところだんだん。

これで奴も……。

「ハア！」「ザシユ！」

そこに死んでいると思っていた人間が立っていた。しかもなにかと戦っていた。

「あれは……。妖魔？？」

風魔党の忍びは倒れたとき自動的に式札が起動し、そこから妖魔があふれ出でてくる仕組みになっている。

だが、彼女はそのことを一切知らない。

「あー…起きた？ちょっと待つてて。これで最後！……！」

人間の何倍もある相手の首を切り落とし、折れてしまつた刀を捨てた。

そして、こちらへ一步一步、歩み寄つてくる。腕からは血が流れた後がある。すこし足取りがおぼつかない。

「おひとつと。ちよつと血を流しすぎたかな～？」

陽気に敵の傍にある木に座つた。なんて無防備なのだろう。

「驚いたよ。憑き物使ひだつたなんて。おかげで血が……。」

「なぜ、私を助けた？」「ん～？特に理由は無いよ。じいて言えば……。君がとても可愛いからかな？」

彼の目に照らされた太陽のような笑顔は私をやさしく照らしてくれた。

「わ、私が……可愛い？顔に傷が入つていても……？」「可愛いことに変わりないと思うけど。」

傷が一本入つたくらいでどうして可愛くなくなるのかなあ、と続ける。

（彼の家の剣術の修行は厳しく、女性であろうと手加減はしない。それ故、顔に傷が入ることもあったのだが、彼女達は皆その傷に誇りを持っていた。b より作者。）

「ねえ、君は僕に仕える気はないかな?」「私が?殺そうとした相手を……?」

何を考えているか分からぬ。この数日間で分かったことなんて一度も無い。

いや、たつた今分かつたことがある。この人はとても恐ろしい人だと……。

「丁度、君みたいな人が欲しかったんだ。それに……平出さんの居場所も……。」

そういうた瞬間、顔に涙が流れる。彼はわかっているのだ。平手は既に私に殺されていることを。

「平手政秀は……。西の山の麓にいる……。」「グスッ……。ありがとう。」

「ありがとう……?殺した相手にありがとう……?本当に読めない人だ……。」

「あと、頼みがあるんだ。仕えるのはやだでも、これはお願いしたい。」

「何だ?」「彼女を助けて欲しい。」

「あの家臣のことも知っていたとは……。」

「分かった。」「重ねて……ありがとう。」

そのまま、寝入ってしまった。ありがとう……。案外、悪くないかもな……。

反対側の森……

「な、なにを……!?」「残念ですが、貴方には死んでもらいます。」

見つけた……。――?この殺氣は――!――!

「だ、誰だ……」「……何をしている?」

真っ黒な髪、顔立ちと体型から女性だらう……。しかし、身なりは粗末。その割には立派な槍のようなものを手に持っている。

「く!吉法師に読まれていたのか!?」「……そんな奴は知らない。」

「ううう。彼は私に助けてやつてくれといった。手はうつてないはず……。」

「ん?じゃあ彼は最初から私を取り込むつもりで……。恐ろしい人だ。本当に。」

「だれであろうと、この場を見たものには死んでもいい!……!」

「無駄だ……。明らかに力の差がありすぎる!私より強い……。彼と同等?いや……。」

ザン！――

刀と共に一刀両断される相手。速い……見えなかつた……。それ
にあの力……。

「そここいる奴も出て來い……。」「私のことまで見破るとは…
…。安心しろ、私は味方だ。」

「吉法師様に頼まれてやつてきた。」「ホントに？」

と腰を抜かしていた家康。

「ああ……。ところで貴方は？」「本多忠勝。」「それでは本多
殿。この方の護衛をお願いしたい」

「なぜ？お前がやればいい。」「生憎、吉法師様は戦いによつて
疲れて倒れた。私は城まで運ばなければならぬ。だから、頼めな
いか？」

「報酬は？」「そちらの方は松平の跡取り。それなりに……。」

「た、倒れちゃったんですか！？大丈夫なんですか！？」「ええ、幸い。命に別状は……。」

「よかつたあ……。あの、本多さん。」「……？」「私からもお願いで来ますか？護衛。」

「分かつた。報酬は貰つ。」「ありがとうございますー。これからお願いしますーーー！」

あれが、彼の一目おく存在か……。そろそろ行くか……。

「えっと、そちらの方……も？」

そこに私の姿はもう無かつた。

「お～い～お～い～！」

「これが見た真っ白な空間。ここはたしか初めて天使にあつたところ。

「うひうひうひーーー。」「……誰ーー？」「始めまして大天使リイエルと申します。」

「私は、ライエルの弟をやらせていただいておりますつていう堅苦しい挨拶はここまでーーー！」

「実は～兄さんに頼まれて～。うんぬんかんぬん。」「ちゃんと説明して……。」

「ほら、なんか刀をあげるって言つてたジャン！」「そ、そうだ

ね……。」「

テンション高いな……。ライエルさんが忙しい理由つて……。

「はいはい、余計な考え方しない!」

「話を戻すけど一刀ね!一刀がね!。ちょっと……。」「

何を深刻そうな顔を……? ?

「盗まれちゃったの!第六天魔王に!でね!そいつが今貴方の世界に下りてるの!—!」

「とこつ」とは……。刀を奪つしかないと……? ?

「ん~、貴方の世界の死靈や妖魔と同じだからつまくいけば……。

」「

「憑き物になつて憑き物使いになれるかも……。と?」「

まあ、善処します。「んじゃーまたね～。」

「ハウー……。」「田が覚めましたか?」「君は……。っていう
か?」「は……?」

先ほどどの忍び。そして、いじめをやめて城へ運んでくれたのか…。

「君がここまで運んでくれたところ」とせ……。「ええ、貴方に仕えましょ。」

よかつた……。いくら歴史の流れを知っているとは言え、イレギュラーがあつては困る。

忍びを使って各大名の情報を集めるところのは重要なことだ。

「そうか、よかつた。頼りにしているよ……。」

「御衣」

裏切りの忠誠（後書き）

えつと無理やりな終わらせ方ですみません！
とりあえず久しぶりの更新だつたので許してください！
忍びが仲間になり、教育係が死んでしました。

次回、第六天魔王降臨？です。w

関西弁キャラ登場……。（前書き）

長らく更新できず申しません。家の事情などで少しづつ更新していきたいです。

関西弁キャラ登場……。

翌日の朝、西の山の麓に平手政秀の死体が発見された……。

「グスッ……、平手さん……。貴方から教わったこと僕は忘れません……。」「

はすだつた……。

「勝手に人を殺さないでください……。」「

なんと、平手さんは生きていたのだ……。

「しかし、一体どうしてあの傷では……。」「そんなにひどかったの?」

「ええ、傷がいたるとこが。ですが……。ここつのおかげで助かりました。」「

背後に映る憑き物……。それは特定の形を留めておらず、ぼんやりと映っていただけであった。

「あれ?憑き物使いだったの?」「ええ、話していませんでした

つけ？

聞いてないよ……。

「ここは傷を癒す力があるんです。まあ、それでも限度はあるんだすが……。」

「最終的にはあなたが助けてもらひたと……。」

少し離れたところにいる少女。

「はい。名前を羽柴秀吉とこいつです。」

後に天下を手にする豊臣秀吉に助けてもらひたと……。やつこく
ば元は農民だった。」

「やつ……。御札をしなくてはこなませんね……。」

「ところでそちらの忍びをなは……？」「ん？ 昨日キリヤに襲い掛
かつたりあの子を暗殺しようとした忍びだけど……。」

「うええーー！危ないですよーー！近づけないでくださいーー！死にます死にますーー！今すぐ死にますーー！」

どんだけ恐怖心と警戒心を抱いてるんだ……。

「はいはい、落ち着いて落ち着いて。」「うむ、其の通りおつだ。少し落ち着け。」

ポンと手を置いただけなのに……

倒れちゃつたよ。

「まあ、しょつがなーな……。そーの兵士れん。城まで運んで

「とにかく、叶ひて……。」「吉良艦とこのへんでせばびこへて……。」「とにかく、叶ひて……。」

「お前どこで此の物の名前は……？」「無い……。お前は捨ててしまつた。」

「えり……。じゃあ、お前をつけないと……。よびやかく、風でいいかな？」

「おがせうこうなうば風とお乗らう。」

「後は……。あの子にお礼をしなことね……。」

「おが、秀吉さんかな？」「ええ、えりですけど……？」

「何かお礼をさせてもうえないかな？」「お礼……。なんのです？」

秀吉

なんだろ？、同じ年にしか見えないのにすく落ち着いて、気品に満ち溢れて、それに……。

(かっこいい。)

「どうかした?」「い、いいえ……。」

「お礼つて言つのは、彼を助けてくれたお礼だよ。」「じゃあ、貴方が?」

だとしたら田の前にいる人はかなりの大物。織田の嫡男、吉法師様……。

「そうだね。そういうことになるかな?」「し、失礼いたしました!」

やばいやばいやばい……！間違になくやばい！…頭下げなくちゃ

。

「ああ、いいよいよ。頭は下げなくていいよ。そういうの大嫌いなんだ。」

「え……？ そなんですか?」「ついでにその堅苦しいしゃべり方も嫌いだね。」

やつぱつ、かつこいし優しい……。

「ええの?」「いいですよ?」「わよかーそれならひつせん
なあ!」

「か、関西弁キャラとは……。」「ん?自分、どないしたん?」

「い、いえ。といひでお礼なんですが……。」

お礼かあ……。なんでもええんやろか?

「ほんなら、つちをあんたんといで動かせてもいいへん?」

「働くんですか?なにかもつといひ、お金とか……。」

「そんなん、お金なんて使つてたらすぐになくなつてまつ。それ
ならあんたんといで働かせてもうつた方がええと思つたんや。」

「なるほど……。分かりました。では、明日使いのものを送るの
で……。」

「ホンマかー？おおきにな～。」「いえいえ、それでは……。行きましょ～、風。」「

おお！最後の最後に忍びが出てきた！ホンマにいたんやなあ忍び
つて……。

関西弁キャラ登場……。（後書き）

あまりじかんが出来ないため、短い文章となってしまいました。
申し訳ありません。

やつと平穏な日が訪れた……はず。（前書き）

更新できずすみません！…呼んでくださる方は少なくとも私はその方達のために書いていきます！…！

やつと平穏な日が訪れた……はず。

あの事件の後に関西弁キャラ、羽柴秀吉をお世話をかりにして何年か。正確な年数も忘れてしまった。家康ちゃんは、これからが頑張りどひで気合を入れてるようだ。

この情報も忍びの風によるものだ。実に優秀で各地の情報を逐一届けてくれる。

「この情報は一体どうやって手に入れてるんですか？」

「仲間からの情報。我々、風魔党の忍びは互いに情報交換することが当たり前。」

「そういえば、お役目放棄して僕のほうに来ちゃって大丈夫なの？」

「随分昔の話をしますね……。問題ありません。我々は互いの仕事には感知しないと決めてますから。」

案外、自由な組織っていうのもいいな……。まあ、今僕の家じゃそもそも言つてられないみたい。

先日、斎藤道三氏との会合が行なわれることが決まりらしい。

嫡子、嫡男としてその会合に出席するらしい。最近の城下町の発展や、数々のアイデアに父親が花を伸ばしているだけなのである。

自分としては出席したくないといひでよ。やつもまゝひへりさん、

数日後と決められてしましました。

「僕の平和な日々はこいつ来るのだろひ……。」「あつと、永遠に来ませんな。」

「うこへつすー信頼へ。あるか~?」

あ、言ひ忘れました。僕は晴れて織田信長になりました。

「うひー。しゃべり方を控えんか!」

とすっかりおひややんになってしまった平出さん。

「うひにいなー、おひややんー。信頼がいにじつといひるこやかうえやひー。」

「あ、おひややんだと……。」

「はや、おひややんこひいてんこひが悪いくん?」

しかも、未婚。

「信頼様まで……。」「口かひ玉ひおつまよ、ヰ。」「え~。ホント?」

じんまいです。

「まあ、これからここ出会いがあつますよ。」

そんなこんなで、まだ戦の無い平穏な日々が続いております。

直に、このまま戻りた」と思ひとせが来るでしょう。だから、今は精一杯……

「街に出かけましょつか！」

やつと平穏な日が訪れた……はず。（後書き）

時間が無くてこれが精一杯です。

次からは本格的な戦国時代に入つていきます。

蛇との会談（前書き）

皆様に読んでいただきありがとうございました。張り切るのですが、どうも伸びません……。

そんな作品ですが、どうぞ。

遂に会談当面……

「うまく和睦ができたらいいけどなあ……。」「主なら問題ないでしょ。」

ありがとう、風。君はいい従者だ……。

「しかし、相手はマムシの道三です。憑き物もマムシとか……。」

君が教育係じゃないほうがよかつたかも……。

「なんやねん、おひちやん。せっかく風が慰めたのに意味ないやん!」

わすが関西弁キャラ。突っ込みは一流だね。

「やつです。私がせっかく場の雰囲気を和ませようとしていたのに……。」

「まあ、いいじゃないですか。」「良いわけないですよ、油断しないでくださいー。」

「また余計なところをついつい、それだからアカンねん。おひちゃん。」

「おひちやんおひちやんっておひきから……」「なんやねん！やるか！？？」

一番心配なのは君たちが妙に騒がしいことだよ。

「はいはいはいはい。分かった分かった。そろそろ着くから静かにして」

互いにいがみ合つて黙る二人に苦笑いした後、目的地の正徳寺についた。

「風は天井裏で待機。一人はうるさいから外で待つて。」

「なーあいつはともかく私は！」「命の恩人にはいつとかいわなーい。行くよ。」

中に入ると、大きな観音様が座つておりかすかな火が反射している。

「やつときたか、織田の小僧。」

「もう、着いていらっしゃいましたか……。申し訳ありません。

「女子は待たせるものではないぞ？小僧。」「重ねて申し訳あ

りません。」

やつぱりあの一人連れてこなくてよかつた……。と胸をなでるす。

「して、お前の父上はまだか？親子そろって人を待たせるのが好きだな？」

「のぐりいの挑発、覚悟していたけどね。やはり暗い。互いに顔が見えない状態……。

しかし、声から三十過ぎの女性のようだ。

「父上は只今天狗となり、天高く飛んでおります。いつ落ちるやも知れぬと忠告しているのですが……。」

「ほほう、白らの父を天狗と罵るか？」「罵つてなどおりません。」

「父上が天狗にならなければ今頃、謀反のにおいすらあつたでしょひ。」

それほどに厳しい。尾張にはいくつもの織田家がある。いつ、そちらへ寝返つてもおかしくは無い。だが、近年の僕の活躍により、家臣たちは離れたりはしない。そして、その活躍を白黙すると言つては、周りのものに今は「ひらにつけ」とつてしているのだ。

「小僧の父が天狗ならむしすめお主は……」「風ですかね。」

…なぜだ？」

「風とはいつ、風向きが変わるか分からぬ。背中を押してくれた風も時には正面から行く手を阻む風となりましょ。」

「これは、和睦を結ぶ際に注意を述べているつもりだけど……。」

「フフフ、ハハハハ！……面白いな、小僧。名を申せ。」「織田上総介信長と申します。」

すると、あちら側から灯のあたるところへ進んで出てきた。

妖美な雰囲気を身に包んでいた。それに、背後にはマムシの憑き物がうかんでいた。

手には杯。そして、酒。

互いに杯に酒を入れて腕を組んで飲み交わす。これは、対等の相手として相手を認める儀式らしい。さすがのマムシも毒などは入れなかつたようだ。

「本題に入りましょつか……」「つむ……」

長い長い時間の末、和睦が結ばれた。だが、いつか敵対すると

きが来る。それもある人が死んだ後に……。

「では、私は失礼します。最後に一つ、謀反などに注意してください。何かあつたら遠慮なく頼つてください。」

「そうさせてもららうよ。小僧。」

名前教えたのに結局は小僧のままか……。

「んで、成功したん?」「うん、中々油断でき無かつたけど……」

「どんな人やつた?」「綺麗な人だつたよ。でも、綺麗なものほどトゲがあるってね。」

あの人の場合むしろ毒かな……?」

「そうか。綺麗な人やつたか……。みてみたかったなあ。」

「また今度会えるんじゃないかな？」

そのときは死体でなきよつと願いします。

「そういえば……婚約したんだつた。」

大きな声が山の中をこだましましたとさ.....。

蛇との会談（後書き）

婚約決定。相手はもちろんあの方。
というわけで、乱世も近づいてきつつも平和な？日々を送っている
主人公達でしたが、婚約が決まり、家内は怪しい雰囲気にな……？

近代化口記・雑賀衆について（前書き）

なかなか更新が出来ませんが……どうかよろしくお願ひします。

前回話したとおり、婚約が決まった。

僕の記憶の中ではもう数年すると戦が起きる。もう具体的な感覚はないのだが……。

その前にやっておきたいことが多々あります。

まだ全然先の話ですが、外国船の登場です。全然先の話でも、この世界では年代がずれていったり、前世とは全く違うところがあります。例えば、武将が女性だとか……。

「ホンーとにかく僕がしたいことは外国の勢力が日本に進出するのを防ぐ……。

つまり、軍事の強化、近代化です。

現代最強の兵器といえば核兵器ですが……。そんなものの手に入るわけありません。

銃ですね。この時代では火縄銃。まだポルトガルの船はきてないようですが……。

「ホンーえ、この日本には外国には存在しない邪術、陰陽術などがあります。

誰にも真似されないようなもの……。独特な銃が必要なのです。
その第一歩として……

傭兵集団雑賀衆に相談といつかあることを頼みに行きます。

なぜ、雑賀衆かといつと……

雑賀衆は傭兵をして金を稼いでいるという印象が強いが、実はそりではない。

たしかに傭兵はしつかりとやつてている。だが、それだけでは雑賀衆全員をとてもまかねえない。

よつて、塩、米などをしつかりと作り、独自の航路を使い売りそばなのです。

その独自の航路に興味があります。噂ではポルトガルと交易をする島国とつながっているとか……。

要はその航路を使い、銃を手に入れたいのです。そして、あわよくば同盟などもちやつかり結んだりしちゃいたいのです。

そのためにはまず、雑賀衆の居場所を突き止めなければなりませんが案外簡単にいきました。

理由は僕が敷いた条例、いわば法律ですね。城下町では織田信

樂市・樂座をやらせていただきました。

「れにより町は自由な売買により雑賀衆から来る方もいらっしゃる。

もちろん、自由とは言つても人間として常識的などいはしつかりやつている。

人身売買をやつとする輩がやつぱりいたんだよね。即刻死刑に……してやつたがつたけど

条件をつけて許してあげた。まあ、行商人として各地を渡り歩き、たまに忍びを送つて報告を聞くだけなんだけね……。

中々の働きぶりで最近は改心して女房も作り、子供ももうじき生まれるとか……。

話を戻しますね……。

雑賀衆かどうか見分ける点については簡単です。そばかすです。なぜだかそばかすが皆ついてるんです。可愛らしく。あ、はい。雑賀衆は男と女が七対三らしいです。もちろん三が男……。

なぜかは分からぬそうです。

あとは返事まぢなんですよね～～～。といふわけで近代化第一歩の日記はこれで終わりです。

一応……番外編のつもりで書きました。感想などジャンジャンくだ
さい……！

魔王たる所以 前編（前書き）

久々の更新。 読んでくださる方もいらっしゃるので、試験をほっぽつています。

そろそろ、物語のメインに入るといつといつです。

最近、領内で不法な取引や人身売買など急激に増えってきた。

これも政策の影響のひとつ

ということであらわ例の計画を発動しようと思つ。

「それで、機動隊の配備を開始します」

今までこのために鍛えてきた兵隊たちはよつやくか、と歓喜の声をあげる。

「はいはい、静かに」

そして、間を一つ置いて

「元々考えていたことだから準備は万全。一週間後には本格的に動かしていく」

ここで選手交代、人事については平田さん＆秀吉の凸凹コンビに任せておいた。

「…………えへ、それに加え、各隊には最低一人、忍びを入れることになっている」

「これは風の案。最低一人でも入れておけば最悪の場合などに対応するため。

「それでは、今日は解散。みんな後日の活動の為体を休めておく事」

「「「「ハツ！－」」」

ぞろぞろと詫問思ひ思いの言葉を口にしながら立ち去る。信用でやれる家臣を残して……

「次に、隠密隊」

驚くべき速さでシユババ！－！と忍びが集まる。

風の鍛えた忍び達は元々親がいない。肉親がいない。身内がない。秘密を漏らす心配がない。

との事。

なんというか、やつきれないと想いでこつぱいだ……。

「はあ」

思わず吐息が漏れてしまった。そこにフツと風が現れた。

「主、今思つてゐることをこの者たち……。忍びとはただ忠誠心のみによつて動いています」

忠誠心を『えりとこつ』となのだらうか……

うーむ、あまり繕つたものとかはいえないからなあ。

「僕は皆が考えるような人ではないかもしない。それでも『人』だ。そして皆も忍びであり、それ以前に『人』だ。厳しい教えをされたかもしれない。心を持つなども言われたかもしれない……」

一つ、間を置いて深呼吸……

「それでも、誰かが死んでしまったときには悲しいと思える心を持つてほしい。痛いと思つたら苦しむ心を持つてほしい。楽しいことがあつたら笑つてほしい。嬉しい事があつたら喜んでほしい。」

「その感情を皆で分けてほしい。悲しいことを皆で分け合えば1-1になる。楽しいことを分け合えば1×になる」

だから、と言おうとしたところで辺りから笑いがあふれる……

「「「アハハハ……」」

「え? な、何これ何これ……?」

「主、そんな鍛え方や教えはしていません……」

あらり、そうなのか……てっきりそんな厳しい事をしてくるの

かと……

「えへ、僕の恥ずかしい発言は置いといて……。皆には世話になるとと思ひ、不甲斐ない僕をどうか支えてください。民なくして國ならず、働くものなくして王立たず……とね」

「だから皆、僕に仕えてくれ」

「「「「承知」」」

膝をつき頭をたれる。これでよかつたかな……

「さて、皆の心が決まったといひで所属を言い渡す。まず……」

「れで、この領地は安泰だ……

魔王たる所以 前編（後書き）

まだ前編なので本命のストーリーには触れていません。
誤字などがあつたら教えてください。
また、アドバイスなども待っています。

魔王たる所以 中編（前書き）

三部作に分けてお送りします。中編です……

機動隊の設置・取り締まりが始まってから大体一週間ぐらーい。

隠密隊が情報を収集、それを通達し、機動隊が取り締まる。

効果は絶大であり、不法取引ができるわでるわ……。つこでに機動隊・警邏部も設置し治安も良くなつてくれる。そうなると、自然と「こちらの仕事が増えていく……。

「次は」の書類です」「あ、ありがと」

「こちあにむ……」「……へ、うん」

「じたばたとせじく動き回る中で一番初めに根を上げる」とことなつたのは……

「あーーーもー、やつてられんわ~」

その場に倒れこむ秀吉のよひだ……

「しつかりしてくれ……後、山一つくらいあるんだから」

もはや機械の様に手を動かすしかないこの状態……。疲れる。

「全く、少しは信長様を見習え」「つるせいなあ~」

もう、グダグダである……とはいえ……」これはきつこ

「同じような書類を二度も何度もなんでもやりあかんのや」

一人が愚痴ると次々にやる気をなくすものが増えてくる……。

「…………よし！ それじゃこいつよつ…………。この仕事が終わつたらとびきり美味しい飯屋に行つて餃子打ち上げをしよう！ ！」

「ハサキナ?」

… そうか、この時代にはこの言葉はないのか…

「打ち上げ」とこの辺の仕事などを終えたときに皆でパーティや

それならば、と次々に筆の速度を上げていくものが出てきた。

おひへつ筆を持ったかと思ひこゝにでも留まひぬ速で片付けてござる……

苦笑いをおくれり……。

「ああ……もし、もう少しやつせか」

カラーンカラーン……と背後で物音がする。どうやら何か連絡があ

るらしい。

背後の壁には仕掛けがあり、一回叩くと木板が外れる仕組みなつている。

「さてさて、風からの連絡は……と」

『最近、齊藤道三の息子に怪しい動きあり……』

一枚目は頼んでおいたこと。確かあの人は謀反で死んだんだから。

『最近、各地の村にて妖魔による殺人。しかし、傷跡はなく病の類ではない。奇跡的に助かつたものによると、確かに刀で切られたらしい。だが、やはり刀傷はない。相手は女性の姿をしている模様』

「……これは……やつと動き出したみたい。引き続き調査してもらえるよつ『赤札』で返しておこう。そして、早期な解決をしよう。

二枚目……

『現松平党首は問題なく、政を行つてゐる。彼女の背後に常に『本多忠勝』や『』が獲得した忠臣により、今のところ謀反などの気配はない様子』

「……これはすぐ心配していたことなのだけれども……問題ないようだ……。

今解決しなければならないことは一つ。謀反と妖魔……。

妖魔のほう方を先に解決しておこう。これでは民が安心して暮

らせないからな……。

早ツ！？（。 。 *）

まあ、終わったようだし……

「あれじゃ、毎日「飯に行」がかかる？」

。喜びの顔を見せ、ともに笑いあう。こんな日が続けばいいのに

飯屋を貸切、大いに騒いだ。
酒を飲ませあつたり、飯を食べた
り……まあ、楽しかつたよ。

「う、ちよつと平手ちゃんが溺死しそうな感じだよ……。」こんな感

「御代はつけといてね、僕は仕事があるから……」「え～！？」

「文句言わずに、飲んでいいね？」
「まかしどきい！た
つぱり飲んだるでーーー！」

うらうら、と他の人たちも巻き込んでいく……

「風」「風」「風」……

「隠密隊春夏秋冬を……」「承知」

フツと消えたり現れたり、忍びつて大変だな……。まあいいや。

ふらふらと目的地へ向かう……

まだまだ触れていいなこよつなどいもありますね……。
まあ、ブランクから立ち直れるよつがんばります。（・・・）

魔王たる所以 後編（前書き）

今回はいろいろな分岐があつたので作者としても悩んだのですが、ようやくまとまつたので、書きます。

少々、長くなります。

魔王たる所以 中編の最後の部分を編集しました。読んでおかないと話が少々分かりませんのでお手数ですが、先にそちらのほうをお願いします。

さてさて、夜道を移動中の僕。織田信長です。ちなみに前世の名前は鏡見蒼弥。

かがみ そうやと申します。

え？ なんで今？ それは作者が長らく考えた末によつやく思いついてうわうきして早く伝えたいとこじりとこじで、関係のない今に名前を出す。という暴挙に出たんです。

「ホンーまあ、いいと思ひます。

ええ、と。こじで注意ですが……前回の編集したお話は見ていただけましたか？ ここからの話は読んでいいとこ理解いただけ名場合がいざいます。一部分だけですが……。

隠密隊春夏秋冬についての説明を長い道のりの中で紹介させていただきます。

隠密隊の中で最も優秀な忍びを、最も重要な任務を……。といふことでさまざまなテストを行った結果。クリアできたのが四人。何かいい名前は無いか？ ということで季節の変わり目ということもあり、春、夏、秋、冬という名前をそれぞれ四人に授け春夏秋冬という名前にさせていただきました。

山道を行くこと一刻、そのものたちよつやくやつてきたようです。

「今まで隠れてるんですか？出てきてください。秋と冬もいつまで化けているつもりですか？」

「ん~、やっぱりバレちゃった~」「これで二十戦二十連敗ツス」

茂みから現れる一人の少女と……

「やはり、敵いません。さすがは……信長、なぜ分かつた？」
人の話を……」

野うさぎと狐に化けていた一人。話を途中でさえぎるダル。

「なぜ……といわれても」「また、やつてるのですか？主」

何をやつているかといふと、最初の頃見破つたとき、彼女たちは完璧に隠れていたのに~と悔しくてたまらず、それから毎回こうやって勝負？が繰り広げられたりしている。

「主は自然から何かを読み取るのが得意なようですからなあ……」

「まあ、そうだね。自然の力を読み取るのが犬神流の一つでもあつたり……あと、老人みたいなしゃべり方だよ？」

犬神流が主に斬る相手、『生氣』生きていくためには必要不可欠なものである。

「これを切り裂くことで相手の生氣の通り道切り裂く、又は生氣そのものを露散させることで相手を行動不能にする。又は殺す……。

犬神流剣術の極意は鋭き爪で魂を刻み、猛々しい牙で生氣を喰らひつ。

喰らひつといつても、一向にお腹は一杯にならないけどね。刀に生氣が乗るだけで、しばらくすると消える。そしてそれをするには生氣の『流れ』を見破らなければならないらしい。これは忍びであろうとまかすことはできない。だからこそ見破れたといつもの……。

禁忌・九十九を教えてくれれば良かつたけど、継承する前に殺されてしまったから……。

「む……確かに私は歳は主よりも上ですが……」

「そうだね。まだまだ可愛いつつレベルだと想いつよ?」

「れ、れべる?とは何か分かりませんが……」

「さて、目的地のところに着いたけど……。これはひどいね……。

…。

山中にある小さな村。ここは一日前から連絡が取れないらしい。もしかしたらと思い、ここに出向いたけど正解だったようだ。

「報告と食い違います。見たところ村のものたち皆傷つけられた後があります」

「ん~? よく見て、死体は噛み傷が多いね。つまりは……」

「何者かが食い漁つた、といふことッスか?」

「そうだね~、ここは瘴気も濃いし。妖魔が多いのかも~」

あ~、フラグたちました。戦闘フラグです……。

「そういう事いふと、妖魔が……」

「グルルル! ! ! 」「ギャウギャウ! ! ! 」「キーキー! ! !

あらら~、いわんこつちやない……。

「妖魔ですね、主」「フウ……。仕方ないね……。戦闘準備~」

犬型が5、鳥型10、小動物型15……。全部五の倍数とか……。

刀に手をかけ手順よく抜いていく……。刃の裏側に指を乗せて滑らせていく……。

「犬神流剣術継承者……鏡見蒼弥。いざ、猛々しく、いただきます」

脇の構えを取り、駆け出す。

合図のように周りの五人が走り出す。

春は呪符、夏は鎧鎌、秋は棍、冬は武装箒手……まあナックル

のよつなもの。

風はあいも変わらず双小刀を使つてゐる。

「疾ツ！」

刀を下から薙ぎ上げる犬型の胴体を捕らえ、生氣を切り捨てる。そのまま後ろ足に力を入れ振り向き様に切り下げる、鳥型を真つ一一つ……。

一度生氣を払い、次の標的に備える。

春は結界を展開し、突つ込んできた小動物一體を燃やす。罠型の呪符を空中にセット、五枚のうち一枚が相手に引っかかる。

夏は犬型の首に鎌を投げ、巻きつけた後に鞭のように力を入れ、相手を中に浮かせる。

跳躍、後に鳥型を踏みつけ様に鎌で切り裂き、跳躍。そして身動きが取れない犬型に鎌を引き、鎌で胴体を一閃……。

秋のターン！棍を振り下げ、頭蓋を貫き地面にたて棍を軸にして、棍と共に真上に跳躍。挟み撃ちにしようとした一體の犬型をピツタリにタイミングを合わせ、一體の頭蓋骨を碎き、一體追加。

棍には団子三兄弟のような犬型三兄弟ができた……。

冬は、すばしっこく動き回る小動物が攻撃してくるまでただ瞳を閉じる。

三体が狙つたのを察知し、回し蹴りで一體を排除。残りの敵は

三体……。

「……めんどくわー……。奥技・旋蹴せんじゅく」

地に手を着き、右手を軸にして回転。旋風を起こし相手をひきつけ、蹴りを逆に回して、排除。

「後、鳥六体。小動物八体……か」

「主は下がってくだされ、いざ、参りますぞ?」

木の葉が舞い、風が横を掠めていく。低い姿勢のまま小動物をとてつもない速さで斬りつけていく

あー、可愛そうな小動物。全部バラバラだ……。

「刺糸・引」

糸が鳥型に絡みつき、糸を引けばブツリ……と音を出し、これもバラバラ……。

「これで全部。にしても、妖魔の動きがおかしかったね……」

「えー? そうシスか?」「夏は馬鹿だから分からぬのよ」

「……妙に組織的な動きをしていた」

「That's Right! -! その通り」

「誰かに操れら手いるのかも知れません。気をつけましょう

不意にズウンと瘴気が濃くなつた……。

「ぐー？ 重いよー、何この瘴気……」「親玉の登場ツスか！？」
「！」

「汝らか？ 我が操る手下を破つたのは？」

「始めまして、鏡見蒼弥と言えば分かりますか？ 第六天魔王」「ほう、汝が天使のおつかいというわけか。 我を連れ戻しに来たのか？」

確かに女性の声だが、低く声が腹の底まで響く、耳に残る。

「おつかい？ 違いますよ……。 僕は貴方を従えに来たんです」

「我の力を欲するか？ フフッ、よからう。 汝の刀と我が剣は良く似ている」

「風、下がつて。 春夏秋冬、四季結界」

「「「「御衣」」」

風は下がり、春、夏、秋、冬はそれぞれ呪文を唱え結界を展開する。

「これで、僕らだけだ」「正々堂々と……といつわけか？」

「こんな姿誰にも見せたくないから……。 だからだ……」

「この結果の中は誰も覗くことはできない。だからこそできる」ともある。

「これは禁止されてるし僕自身嫌いなんだよ。禁忌・十一」

羽織を脱ぎ捨て、憑依状態に入る。

「聞いたことがある。汝、犬神流継承者か……。その身に流れる犬神の力を呼び覚ますか……」

「ハツ！構えろよ、ギツタギタに食い散らかしてやるよー？」

「なるほど、醜いな……では行くとするか

真っ赤な刀身をもつ刀を引き抜き、鞘を抜き捨てる相手……。

「殺！禁忌・秘伝・秘技・絶抹殺剣！……」

刀と刀がぶつかりあつとこつレベルの音ではない、衝突する、鼓膜を押さえたくなる音が響く。

「手が痺れる……。なんという馬鹿力よのうしかし、力に頼るのはよろしくない……」

「そうせツ！……その為に……僕がいる

「なんと！？」「

魔王の隙をついたかと思われる攻撃は見透かされており、かわ

されてしまった。

「犬神の力を操れねば、継承者にはなりえませんよ……？」

「甘く見ておったようだ」

「ふう、なんかもう疲れますね」「気が合ひのう？」

「「一撃できめましょ（るかのう）」」

一人同時に駆け出し、同時に振りかざす。

刹那……空間は崩れ、結界はとかれた……。

どうなつたかは次話で語りたいと思います。
長くなってしまったことをお詫びします。

魔王との決着（前書き）

おおう、更新が遅れてしまい申し訳ありません。
テストが忙しかつたもので…… w

魔王との決着

『戦いで勝つたからといって油断してはいけません。本当の戦いはその後です……』

なるほど……。ソウニツヒトだったのか……。

灼熱のマグマが吹き上げる火山の真上に広がっている見えない床……

恐らく、ソレは第六天魔王の精神世界。

早期決着でケリをつけたのが正解だった……。

「中々やるじやない？私をソレまで追い詰めるなんて……」

「誰ですか？」「何を言つてゐるの……、やつきまで戦つていたじゃない」

「……第六天さん？」「当たり前じゃない」

いやいやいやいやいや……、性格変わらずでしょ……。
え、もう果然とするしか……

「いや～、あの鎧着ると……あんなしゃべり方しか出来なく

て困るわ

「そんな能力が?」 「ええ、衝撃を緩和してくれるし……。貴方の攻撃……」

妖艶な笑みを浮かべてわざやくようじに詠つ……

「……」 れがなかつたら、死んでたわ?」

思わず、身震いしてしまった。寒気が背中を走りましたよ……?

「さて、決着をつけましょ?」 「ええ、そうですね……」

「話しえごで……」

「おお、見事なシンクロ……。もう契約成立でいいじゃないですか?」

「ふふ、常々気が合つわね。でも、王としての覚悟は聞かない
とね……」

「覚悟……ですか？」

「人の上に立つのがうれしくらいの覚悟はしているんでしょ
う？」

「言葉にすると難しいですね……」

「大切な人を守る……その為に貴方は家族を殺せる？」

「……ふむ、その可能性すら潰す」「回避できない運命だった
ら？」

大きく息を吸い、自信満々に言葉を吐き出す。

「運命と偶然は紙一重……。運命を偶然に変え、回避してみせ
る」

「自分を差し出せといわれたら？」

「それは出来ない。」この命は……僕一人だけの物ではない

この世界で、介入されることなどなければ普通に生きている

織田信長

介入したことによる、信長という一人の魂の消去

「僕一人の命で助かるという可能性すらも潰す

「可能性を潰す……ね、嫌いじゃない表現よ……」

「それだけじゃあ……ね?」と、彼女は言った

「望みですか? 何が望みなんですか?」

「大天使に天に戻すよう頼んでくれない?」

「それだけ?」「ええ」

てつきり、魔王だから世界をくれなんて言つのかと思つた……。
といつのは黙つておひつ。

「汝、我が剣となれ」「汝、我が憑代となれ」

「「我ら、互いの承認を持つここに契約を成す」」

第六天が体の中に吸収されていく。

胸に手をあて、話しかける。

「これからよろしく……」

魔王との決着（後書き）

すみません、時間があればもう少しともにかけたのですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026m/>

第六天魔王の真実

2011年1月31日05時03分発行